

# 受けついでいこう! 地域の伝統

## 太鼓踊り

ぼくは、蒲生で毎年行われている太鼓踊りに参加することになった。蒲生太鼓踊りは江戸時代から四百年以上もずっと続く、地域の伝統的な行事の一つだ。四つの地域が踊りをひろうることになっている。ぼくは、これまで何度かさそわれたが、練習がとても大変と聞いていたので、参加せずにいた。そんな時、一年生の時からずっと仲良しのりょう介が、

「今年は、いっしょに踊りに出ないか。みんなも喜んでくれるよ。」と今年も声をかけてきた。りょう介の言葉を聞いて、ぼくは、「いっしょにがんばってみよう。」と参加を決めた。

本番の二か月前になり、いよいよ練習が始まった。りょう介は毎年参加していることもあり、小学生の中心となって、一年生に声をかけ指導している。練習は、毎日夜おそくまで続いた。

夏休みが始まった。踊りの練習はここからが本番だ。練習は、少しずつつくっている。手足が痛くてもう動かせない。そんな時、いっしょに練習しているけんじが、

「今日、夏祭りに行かないか。一日ぐらい、いいよな。」と声をかけてきた。

「行く。いっしょに行こう。」と練習にうんざりしていたぼくは、すぐに答えた。夏祭りはとても楽しく、特に最後の花火は本当にきれいだった。

次の日、近くに住んでいるおじいちゃんが家に訪ねてきた。

「踊りの練習がんばっているみたいだな。じいちゃんが、小学生のころもみんな練習をがんばっていたんだよ。じいちゃんは、初めは練習はあまり好きではなかったな。だけど、友達や先生、近所の人から『太鼓踊りに参加していてすごいな。がんばれよ。』とはげましてくれたんだよ。それがうれしくて練習を休まずに行くようになったんだよ。地域の大切な踊りだから、みんなを守っていくかといかないもんな。じいちゃんももっと若ければ、今でもいっしょに練習に参加できるんだけどなあ。本番が楽しみだな。応援してるよ。」

とじいちゃんは、ぼくを励ましてくれた。ぼくは、少し下を向きながら静かに聞いていた。

ぼくはその後、がむしゃらに練習するようになった。相変わらず手足は痛い、休もうとは思わない。体が自然と動いているような気がした。ふと周りを見ると、りょう介がほほえみながらぼくを見ていた。ぼくは、りょう介の顔をしばらく見つめ、小さく笑顔を返した。

八月二十一日、本番当日をおかえた。きんちょうはしているが、不安は無い。今まで練習をいっしょにがんばってきた仲間がいるからだ。ぼくは、近くのじいちゃんの家へ行って、

「じいちゃん、踊り見に来てね。」と声をかけ、走って神社へ向かった。

